性は子どもをもつことをより社会的機能をはたすためと位置づけているようである。また、現在の生活の充実については、子どもを持っている男女の評価が高く、実際に子どもを育てるという経験をすれば、そのことによるメリットを実感しているものと考えられる。未婚女性については、どの因子得点も 6 グループ中最も低い点数であった。未婚女性はどのような側面からも子どもを持つことのメリットを感じられないという結果であると考えられる。

5-2. 子どもを持つデメリットについて（Q23A）

子ども数を抑制する要因として、ひとびとが子どもを持つことに対して感じるデメリットについて検討するため、「子育ての負担感」に関する 7 項目を準備し 4 件法で回答を求めた（Q23A）。以上のデータを用い因子分析を行ったところ、1 因子が抽出された。しかしながら、子育ての負担感として全項目を合計して分析するよりは、個々の項目の内容ごとに分析を行った方が適当であると判断したため、本要因については複数の項目を合わせた因子得点は算出せず、個々の項目得点を分析に用いることとした。

各項目得点について、性別、婚姻形態、子どもの有無で分けた回答者 6 グループ（未婚男性／既婚子なし男性／既婚子あり男性／未婚女性／既婚子なし女性／既婚子あり女性）ごとに平均値と標準偏差を出した結果を、表 5－2－1、図 5－2－1 に示した。

表 5－2－1　子育ての負担感

		子どもがいると家計が圧迫される	子どもがいると好きなことをする自由がなくなる	子どもがいると世話が大変	子どもがいるとストレスや心配事が増える	子どもがいると教育費がかかる	子どもがいると仕事に専念できない	子どもがいると自分の時間がなくなる
未婚男性	平均値	2.79	2.80	2.84	2.71	3.09	2.30	2.71
	標準偏差	0.69	0.67	0.67	0.70	0.66	0.69	0.69
既婚子なし男性	平均値	2.86	2.86	2.85	2.77	3.07	2.31	2.76
	標準偏差	0.68	0.67	0.66	0.66	0.59	0.66	0.67
既婚子あり男性	平均値	2.66	2.82	2.72	2.56	2.93	2.13	2.72
	標準偏差	0.71	0.69	0.70	0.73	0.64	0.69	0.71
未婚女性	平均値	2.85	2.93	2.93	2.89	3.15	2.69	2.94
	標準偏差	0.66	0.62	0.65	0.66	0.58	0.70	0.66
既婚子なし女性	平均値	2.99	3.03	3.00	2.97	3.23	2.79	3.00
	標準偏差	0.64	0.65	0.64	0.65	0.58	0.71	0.65
既婚子あり女性	平均値	2.81	2.92	2.87	2.92	3.14	2.63	2.92
	標準偏差	0.66	0.64	0.63	0.62	0.58	0.70	0.66
合計	平均値	2.83	2.89	2.87	2.80	3.10	2.48	2.84
	標準偏差	0.68	0.66	0.66	0.69	0.61	0.73	0.68

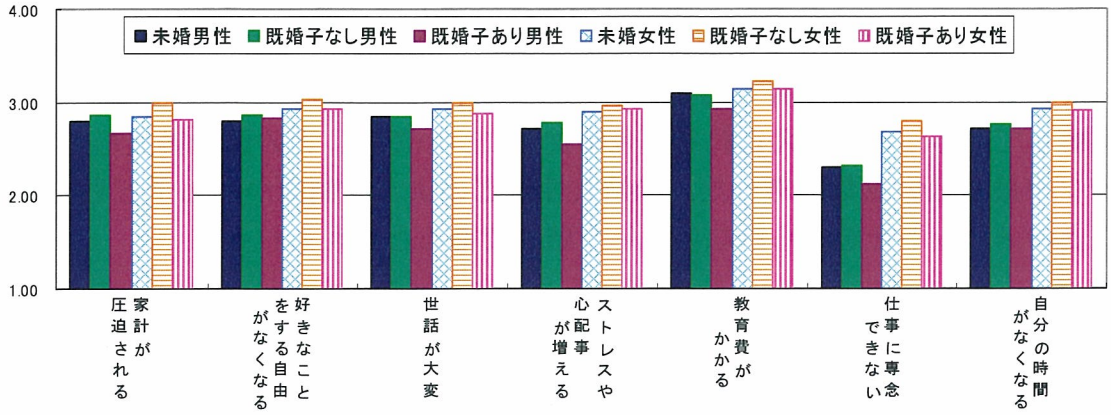


図5－2－1　子どもを持つ負担感（自分）

各項目得点についてグループ間に得点の差があるか検討するため、1元配置の分散分析を行った結果、すべての項目得点で有意な差がみられた。（Q23A(1)家計が圧迫：F(5、3921)=16.17、p<.0001、Q23A(2)自由がなくなる：F(5、3921)=11.30、p<.0001、Q23A(3) 世話が大変：F(5、3921)= 13.68、p<.0001、Q23A(4)ストレスが増える：F(5、3921)= 33.99、p<.0001、Q23A(5)教育費がかかる：F(5、3921)= 18.26、p<.0001、Q23A(6)仕事に専念できない：F(5、3921)= 95.08、p<.0001、Q23A(7)自分の時間がなくなる：F(5、3921)= 22.808、p<.0001）。Scheffe 法による多重比較の結果、「家計が圧迫される」という項目については、既婚子なし女性が一番高く、未婚男女と既婚子なし男性と既婚子あり女性がついで高く、既婚子あり男性が一番低かった。「自由がなくなる」項目については、女性 3 グループが高く、ついで既婚子あり、なし男性グループが高く、未婚男性が一番低かった。「世話が大変」項目については、既婚子なし女性と未婚女性で高く、既婚子あり女性と未婚男性、既婚子なし男性が次いで高く、既婚子あり男性が最も低かった。「ストレスが増える」項目については、女性 3 グループが最も高く、次いで未婚男性と既婚子なし男性が高く、既婚子あり男性が最も低かった。「教育費がかかる」項目については、既婚子なし女性が最も高く、ついで未婚男女と既婚子あり女性と既婚子なし男性が高く、既婚子あり男性は最も低かった。「仕事に専念できない」項目については、未婚女性と既婚子なし女性が一番高く、ついで既婚子あり女性が高く、ついで未婚男性と既婚子なし男性が高く、既婚子あり男性が一番低かった。「時間がなくなる」項目については、女性 3 グループが男性 3 グループよりも得点が高かった。

以上の結果から、どの項目も男性より女性のほうが負担感を感じていることがわかった。実際に子育てをしており、実感として負担感を感じているはずの既婚子ありグループでは、男女の差が最も明確に現れており、男性はどの項目でも最も得点が低く比較的負担感を感じていないことが明らかになった。つまり

男性は、子育てをする上での労力を実際的にはほとんど費やしておらず、負担を実感していないのだと考えられる。一方で、まだ子どもがいない既婚子なし女性の負担感が最も高く、周囲の子どもを持つ女性の苦労を見ているために、自分はまだ現実には苦労していなくても負担に対する予測が高く、子どもを持つことのデメリットを強く感じているのではないかと考えられた。

5-3 子どもを持つきっかけ

全体では、経済的なゆとりや子どもができるときの年齢が意識されている。良い保育園があることがきっかけでない。(→保育園をつくることと子どもの数の増加に関係有るのか？)
男女では、女の人の方が、経済的なこと、子どもができるときの年齢を考えている。男性は関係がない。
女性について働き方別に見ると、片働きの人は、比較的経済的なことを考えていない。(片働きの人はリッチなのか？)。
派遣・嘱託の人は大変重視している。(今後皆の働き方が、派遣や嘱託にシフトしていったらますます経済的な部分が重要になる)

6．子育てに関する考え方

子育てをする上で人々が持つ価値観についての分析を行った。

6-1．子育てに関する価値観（Q21）

子育てをどのようなものととらえているかを調べるため、「子育て観」に関する８項目を準備し（Q21）４件法で回答を求めた。以上のデータで因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、固有値や内容のまとまりを考慮した結果、２因子を抽出した（表６－１－１）。第１因子は「子育てを経験することで自分が成長する」などの項目が含まれているため子育てを自分の成長のための経験と位置づけていると考え「自分の成長」因子と命名した。第２因子は「子どもが望むことを何でもさせてあげるのが親としてのつとめだ」などの項目が含まれているため、子育てを子どもの成長への貢献と位置づけていると考え「子どもへの貢献」因子と命名した・

表６－１－１　”子育て観”　因子分析結果

	自分の成長	子どもへの献身
子育てを経験することで，自分が成長する	0.875	−0.186
育児の大変なことも知ってはじめて，子どもに対する愛情が深くなる	0.834	−0.051
結婚したら子どもをもつべきだ	0.486	0.219
子どもは生きがいである	0.462	0.364
子どもが小さいときには誰かが家にいて面倒を見るのがよい	0.387	0.110
子どもは自分の分身だ	0.006	0.719
子どもが望むことを何でもさせてあげるのが親としてのつとめだ	−0.068	0.597
子育ては失敗が許されない	−0.015	0.349
寄与率（%）	41.127	14.509
累積寄与率（%）	41.127	55.636

それぞれの因子ごとに因子得点を算出し、性別、婚姻形態、子どもの有無で分けた回答者６グループ（未婚男性／既婚子なし男性／既婚子あり男性／未婚女性／既婚子なし女性／既婚子あり女性）ごとに平均値と標準偏差を出した結果を、表６－１－2、図６－１－１に示した。

各因子得点について、グループ間に得点の差があるかについて、１元配置の分散分析を行った結果、すべての因子得点で有意な差がみられた（自分の成長：$F(5, 3921)=62.10$、$p<.0001$、子どもへの貢献：$F(5, 3921)=49.72$、$p<.0001$）。Scheffe 法による多重比較の結果、「自分の成長」因子得点については、既婚子あり男女の得点が他の４グループの得点より有意に高かった。「子どもへの貢献」因子得点については、既婚子あり男性の得点が一番高く、既婚子あり女性と未

婚男性と既婚子なし男性の得点が次に高く、既婚子なし女性と未婚女性の得点が最も低かった。

以上の結果から、子育ては自分を成長させてくれると考えているのは、実際に子どもを持ち育てるという経験をしている人であることがわかった。また、子どもに対して自分の分身だと考えたり何でもさせてあげたいと考えるような、子どもへの思い入れが大きいのは、既婚の子あり男性で、同じ既婚子ありでも女性はその意識は低くなることがわかった。また、未婚女性と既婚子なし女性は、どちらの考え方についても低い評価しかしておらず、厳しい子育て観を持っていると考えられた。

表６－１－２　グループ別”子育て観”の因子得点

		平均値	標準偏差
未婚男性	自分の成長	−0.08	0.99
	子どもへの献身	0.01	0.85
既婚子なし男性	自分の成長	−0.16	0.97
	子どもへの献身	−0.02	0.88
既婚子あり男性	自分の成長	0.38	0.77
	子どもへの献身	0.38	0.76
未婚女性	自分の成長	−0.23	0.94
	子どもへの献身	−0.25	0.85
既婚子なし女性	自分の成長	−0.20	0.87
	子どもへの献身	−0.21	0.79
既婚子あり女性	自分の成長	0.32	0.73
	子どもへの献身	0.10	0.81

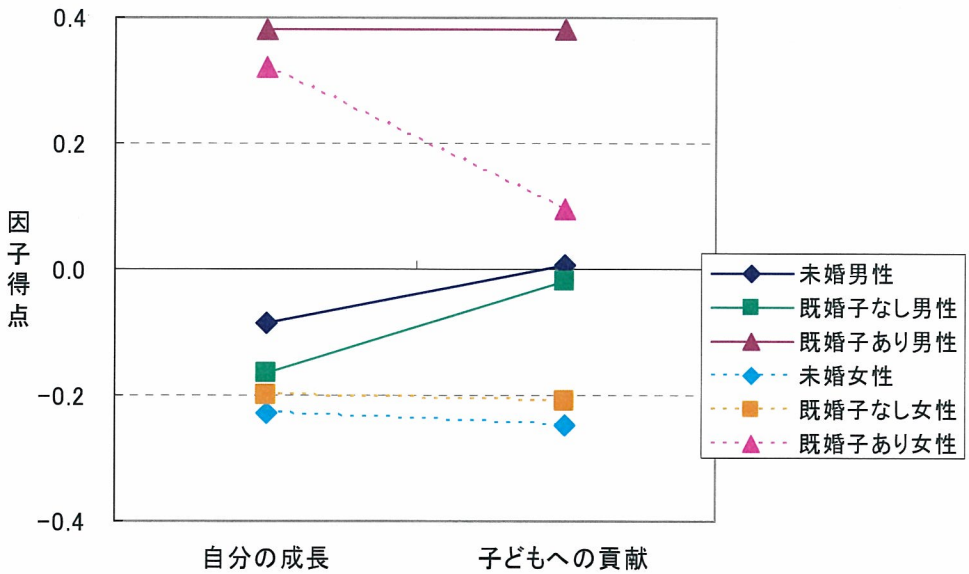


図６－１－１　子育て観

6-2. 育児担当者についての考え方（Q22）

子育てをどのように行おうと考えているかについて調べるため「子育てに関する性別役割」についての 16 項目を準備し（Q22）4 件法で回答を求めた。以上のデータを用い因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、固有値や内容のまとまりを考慮した結果、2 因子を抽出した（表 6－2－1）。第 1 因子は「父親は外で働き母親が育児の責任を持つのが自然だ」などの項目が含まれているため「子育ては母親」因子と命名した。第 2 因子は「子育ては夫婦 2 人が同じくらい関わるべきである」などの項目が含まれているため「子育ては両親」因子と命名した。

表 6－2－1 ”子育てに関する性別役割”についての考え方 因子分析結果

	子育ては母親	子育ては両親
父親は外で働き母親が育児の責任を持つのが自然だ	**0.814**	−0.104
女性の一番重要な仕事は，家族を守り子どもを育てることである	**0.791**	−0.034
職業の有無に関わらず，家事や育児は女性の役割・責任である	**0.758**	−0.164
子どもが3歳くらいになるまでは母親は育児に専念すべきである	**0.687**	0.028
父親が仕事のために育児や子どものことに手がまわらないのはやむを得ない	**0.625**	−0.179
父親の出番は子どもがある程度大きくなってからだ	**0.563**	−0.199
子どもの世話や教育は，父親は母親にはかなわない	**0.535**	−0.037
母性愛は女性の持つ本能だ	**0.528**	0.165
父親も積極的に育児に参加するべきだ	−0.101	**0.822**
子育ては夫婦2人が同じくらい関わるべきである	−0.103	**0.770**
妻が仕事を持っている場合には，夫も家事を平等に分担するべきだ	−0.076	**0.735**
父親にとっても，仕事と育児は同等の重みを持つ	−0.057	**0.727**
男性も，育児休業をとるなど育児を配慮した働き方を考えるべきだ	−0.054	**0.650**
母親が仕事をしていても，愛情豊かでしっかりした親子関係を築くことができる	−0.089	**0.561**
家事や育児を妻任せにする男性は，人生の大切なものを失っている	0.045	**0.526**
父親だけでも子どもを立派に育てることができる	−0.034	**0.374**
寄与率（%）	22.826	22.692
累積寄与率（%）	22.826	45.518

それぞれの因子ごとに因子得点を算出し、性別、婚姻形態、子どもの有無で分けた回答者 6 グループ（未婚男性／既婚子なし男性／既婚子あり男性／未婚女性／既婚子なし女性／既婚子あり女性）ごとに平均値と標準偏差を出した結果を、表 6－2－2、図 6－2－1 に示した。

各因子得点について、グループ間に得点の差があるかについて、1 元配置の分散分析を行った結果、すべての因子得点で有意な差がみられた（子育ては母親：$F(5、3921)=631.10$、$p<.0001$、子育ては両親：$F(5、3921)=19.75$、$p<.0001$）。Scheffe 法による多重比較の結果、「子育ては母親」因子得点については、既婚子あり男性の得点が最も高く、次いで既婚子あり女性と未婚男性と既婚子なし男性の得点が高く、未婚女性と既婚子なし女性の得点が最も低かった。「子育て

は両親」因子得点については、女性 3 グループの得点が最も高く、次いで既婚子あり男性が高く、未婚男性と既婚子なし男性の得点は最も低かった。

以上の結果から、男性と女性では、子育てに関する性別役割についての考え方が全く異なっており、男性は母親が子育てを担当した方がいいと考えており、女性は両親で子育てをした方がいいと考えていることがわかった。

表 6－2－2　グループ別”子育てに関する性別役割についての考え方”因子得点

グループ	因子名	平均値	標準偏差
未婚男性	育児は母親	0.05	0.98
	育児は両親	−0.17	1.00
既婚子なし男性	育児は母親	0.01	0.97
	育児は両親	−0.17	1.01
既婚子あり男性	育児は母親	0.31	0.90
	育児は両親	−0.05	0.85
未婚女性	育児は母親	−0.27	0.93
	育児は両親	0.10	0.98
既婚子なし女性	育児は母親	−0.16	0.90
	育児は両親	0.07	0.86
既婚子あり女性	育児は母親	0.06	0.85
	育児は両親	0.24	0.84

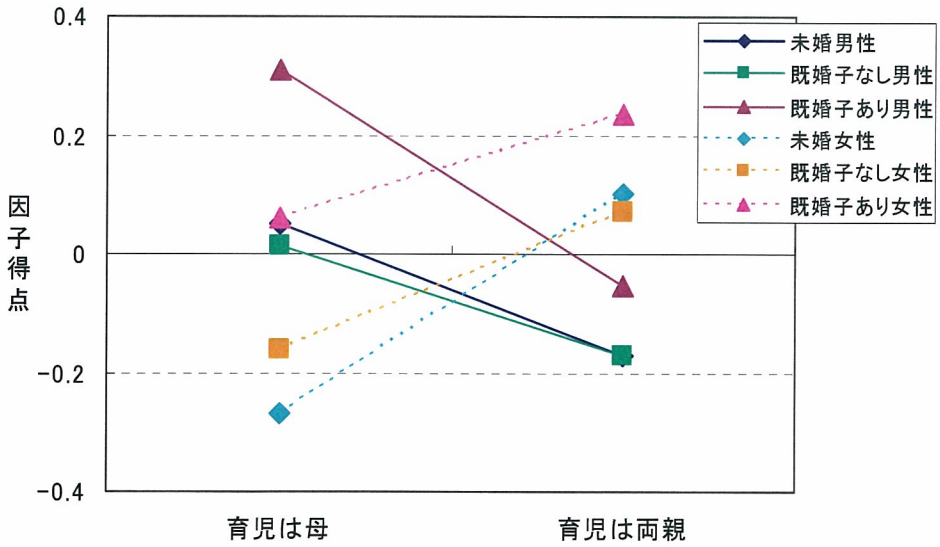


図6－2－1.子育てに関する性別役割についての考え方

7．育児休業制度についての考え方

育児休業制度の利用について、人々がどのように考えているかについて分析を行った。

7-1. 育児休業制度の利用についての考え方（Q25）

育児休業制度への意識を調べるため「育児休業制度の利用」について 11 項目を準備し（Q25）4 件法で回答を求めた。以上のデータを用い因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、固有値や内容のまとまりを考慮した結果、2 因子を抽出した（表 7－1－1）。第 1 因子は「ある程度の給料の補償がないので、利用しづらい」などの項目が含まれているため「利用環境の悪さ」因子と命名した。第 2 因子は「仕事への責任があるので、育児休業制度を利用したくない」などの項目が含まれているため「利用意思のなさ」因子と命名した。

表 7－1－1　育児休業制度の利用についての考え方　因子分析結果

	利用環境	利用意思
ある程度の給料の補償がないので、利用しづらい	**0.782**	0.054
職場では育児休業制度をとりにくい雰囲気がある	**0.666**	0.227
育児休業制度を利用すると収入が減って家計が苦しくなる	**0.654**	0.145
周囲の人が取らないので，育児休業制度を利用しにくい	**0.648**	0.329
育児休業制度を利用すると，昇進に不利になる	**0.604**	0.287
育児休業制度を利用すると職場での居場所がなくなる	**0.595**	0.393
現在の仕事が忙しくて，育児休業制度を利用することは不可能である	**0.504**	0.414
育児休業制度を利用すると，仕事のブランクのため能力が落ちる	**0.443**	0.399
仕事への責任があるので，育児休業制度を利用したくない	0.301	**0.688**
育児休業制度を利用すると職場の人に迷惑がかかる	0.424	**0.512**
妻が育児をするため，夫が育児休業制度をとる必要はない	0.021	**0.483**
寄与率（%）	30.376	15.626
累積寄与率（%）	30.376	46.001

それぞれの因子ごとに因子得点を算出し、性別、婚姻形態、子どもの有無で分けた回答者 6 グループ（未婚男性／既婚子なし男性／既婚子あり男性／未婚女性／既婚子なし女性／既婚子あり女性）ごとに平均値と標準偏差を出した結果を、表 7－1－2、図 7－1－1 に示した。

各因子得点について、グループ間に得点の差があるかについて、1 元配置の分散分析を行った結果、すべての因子得点で有意な差がみられた（利用環境の悪さ：$F(5, 3921)=9.60$、$p<.0001$、利用意思のなさ：$F(5, 3921)=11.67$、$p<.0001$）。Sceffe 法による多重比較の結果、「利用環境の悪さ」因子得点については、既婚子あり男性が一番高く、ついで既婚子あり女性と既婚子なし男女が高く、未婚男女は最も低かった。「利用意思のなさ」因子得点についても同様に、既婚子あ

り男性が一番高く、ついで既婚子あり女性と既婚子なし男女が高く、未婚男女は最も低かった。

制度の利用環境と本人の取得意思については得点に差がなかったことから、男性の育児休業制度の利用が低いのは、どちらか一方の要因によるものではなく、両方の要因が関わっていることがわかった。男性の中でも、実際に子どもがいて利用すべき状況に直面している人ほど、利用環境が整っていないと考える一方で自身の利用意思もないことから、環境が整っていないことを理由に子育てに主体的に関わることから目をそむけている可能性もあると考えられた。

表 7－1－2　グループ別”育児休業制度についての考え方”因子得点

グループ	因子名	平均値	標準偏差
未婚男性	利用環境	−0.11	0.97
	利用意思	−0.12	0.93
既婚子なし男性	利用環境	0.04	1.00
	利用意思	0.03	0.92
既婚子あり男性	利用環境	0.18	0.95
	利用意思	0.20	0.88
未婚女性	利用環境	−0.11	0.90
	利用意思	−0.12	0.83
既婚子なし女性	利用環境	−0.04	0.92
	利用意思	−0.02	0.88
既婚子あり女性	利用環境	0.06	0.86
	利用意思	0.03	0.79

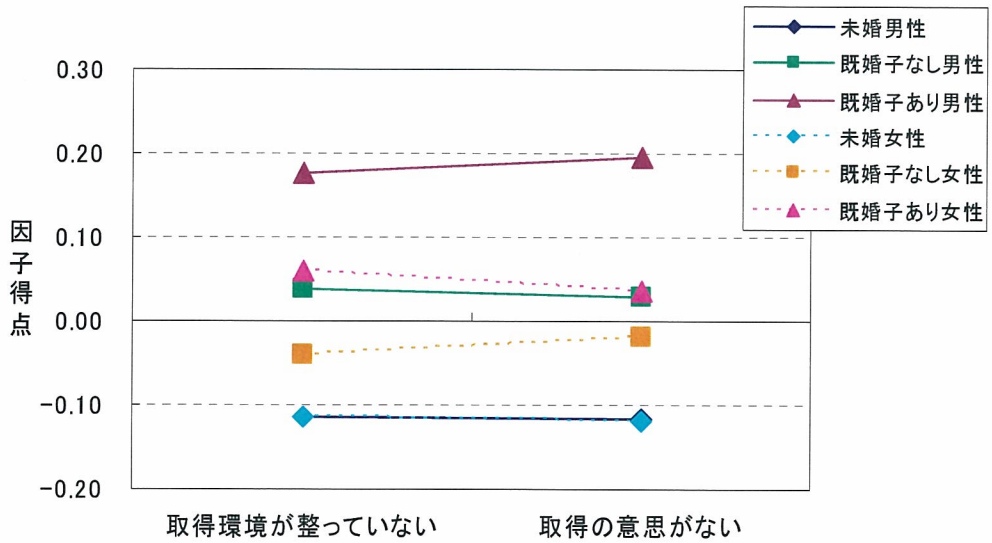


図7－1－1　育児休業制度についての考え方：
グループ別

7-2. 有給休暇の取得状況と育児休業制度利用についての考え方(Q29)

育児休業制度利用の意識の一側面として、「利用環境の悪さ」があがったが、育児休業制度を利用しづらい環境なのは、育児休業制度が浸透していないためだろうか。あるいは日頃から休暇をとりづらい労働環境なのであろうか。

日ごろの労働環境が育児休業制度の利用と関連があるかについて検討するため、有給休暇の取得状況（Q29）によって、育児休業制度の利用についての考え方に違いがあるか分析を行った。

まず、「Q29 あなたは有給休暇を取得することができますか」という設問への回答から、十分に取得しているグループ(883 名)、あまり取得できていないグループ（1146 名）、全く取得できていないグループ（426 名）、有給休暇制度がないグループ（562 名）の 4 グループにわけた。次に育児休業制度利用の考え方の「利用環境悪さ」因子得点と「利用意思のなさ」因子得点について、4 つのグループごとに平均点と標準偏差を算出した（表 7－2－1、図 7－2－1）。

各因子得点について、グループ間に得点の差があるかについて、1 元配置の分散分析を行った結果、すべての因子得点で有意な差がみられた（利用環境：$F(3、3076)=46.1$、$p<.0001$、利用意思： $F(3、3076)=37.9$、 $p<.0001$）。

Sceffe 法による多重比較の結果、「利用環境の悪さ」「利用意思のなさ」の両方ともに、有給休暇が全く取得できていないグループの得点が一番高く、次にあまり取得できていないグループの得点が高く、次に有給休暇制度がないグループとなり、十分に取得できているグループの得点が最も低かった。

以上の結果から、日ごろから有給休暇をとりやすい職場環境であれば、育児休業制度の利用についても利用しやすいと考え、利用の意思も高まることがわかった。有給休暇がない職場環境の場合は、育児休業制度の利用についても有給休暇制度についても、現状では環境が整っていないが、制度が整えば取得したいという希望があるのではないかと考えられた。有給休暇が制度としてあっても、また、取りづらい環境の職場では、実際に利用する意欲を低下させるということが明らかになった。つまり、育児休業制度の実際の利用につなげるには、育児休業制度を整えるだけではなく、有給休暇の取得のような日常的な労働者の権利の行使を阻害しないような職場環境作りが重要であると言えるだろう。

表 7－2－1　有給休暇の取得状況別”育児休業制度についての考え方”因子得点

有給休暇の取得状況	因子名	平均値	標準偏差
十分に取得している	利用環境	−0.24	0.96
	利用意思	−0.18	0.88
あまり取得できていない	利用環境	0.11	0.90
	利用意思	0.12	0.85
全く取得できていない	利用環境	0.35	0.96
	利用意思	0.30	0.92
有給休暇制度がない	利用環境	−0.04	0.93
	利用意思	−0.10	0.89

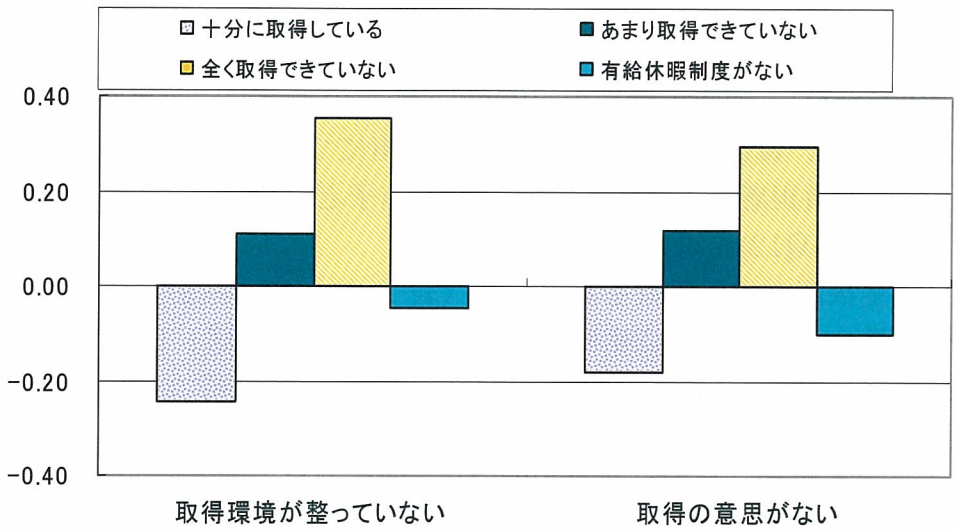


図7－2－1　育児休業制度についての考え方：
有給取得状況別

8．子育ての負担と欲しい子どもの数との関連について

理想の数の子どもがもてない理由として、経済的負担があがることが多い。また家事・育児と仕事との両立が難しいことから、2人目以上の子どもをもつことを断念するカップルもいる。子どもの数の減少への影響要因として、労力的・経済的子育ての負担は大きいのであろうか。

男性と女性の、子どもを育てていく上での労力的・経済的な実際の負担、それにともなって感じる子育ての負担感と、欲しい子どもの人数の関連について分析を行った。

子育てにおける実際の負担として、「本人の週平均労働時間（Q5sｑ3）」「配偶者の週平均労働時間（Q9sq4-1）」「本人の週の家事・育児従事時間(Q31)」「昨年の個人年収(Q5sq5)」「昨年の世帯年収(Q8)」「昨年の子どもの教育費(Q10sq3)」の6変数を用いた。負担感として、子育ての負担についての7項目(Q23A)を合計し、「子育ての負担感」として用いた。欲しい子どもの数は、「実際に持つと思う子どもの数」(Q12)を用いた。

男女別に各変数間の相関係数を算出した（表 8－1、表 8－2）。その結果、男性の場合、「週の家事・育児従事時間」と「子育ての負担感」に弱い負の相関（r<-.07）があり、「週の家事・育児従事時間」と「実際に持つと思う子どもの数」には弱い正の相関（r<.11）があり、さらに「子育ての負担感」と「実際に持つと思う子どもの数」に弱い負の相関（r<-.13）が見られた。

以上のことから男性の場合は、家事育児に従事していないほど子育ての負担感を感じており、また子育ての負担感を感じているほど実際に持つと思う子どもの数が少ないことがわかった。逆にいうと、実は男性が子育てにコミットするほど負担感は減り、多くの子どもを持とうと思うということである。一般に子育ては女性に向いているように考えられているが、男性も実際に子育てに関われば、負担を感じるのではなく、充実感を得たり子育てを楽しんだりできるため、子どもを持とうという動機づけが促進されると言えるだろう。

女性の場合、「配偶者の週平均労働時間」と「子育ての負担感」に弱い正の相関（r<.07）があり、「昨年の子どもの教育費」と「子育ての負担感」に負の相関（r<-.13）が見られた。また、「本人の週平均労働時間」と「実際に持つ思う子どもの数」に弱い負の相関（r<-.08）、「週の家事・育児時間」と「実際に持つと思う子どもの数」に正の相関（r<.30）、「個人年収」と「実際に持つと思う子どもの数」に負の相関（r<-.17）、「世帯年収」と「実際に持つと思う子どもの数」に弱い負の相関（r<-.06）、そして、「子育ての負担感」と「実際に持つと思う子どもの数」に負の相関（r<-.13）が見られた。

女性の場合、子育ての負担感に影響が強いのは、配偶者の労働時間であることがわかった。これは、配偶者が長く働くほど、女性ひとりに子育ての負担がかかるためであると考えられる。逆に男性は、配偶者の労働時間と子育ての負担感に関連は見られず、配偶者が有職者であっても専業主婦であっても、男性の育児へのかかわりは負担に感じるほどではない、つまり育児に関与する程度は妻の就労に関わらず低いということを示している。

また女性の「実際に持つと思う子どもの数」に関しては、労働時間が長いほど少なくなり、家事時間が長いほど多くなった。この結果を解釈するにあたっては、女性の就労状況が正規職員や契約社員、パート、専業主婦などさまざまであることを考慮する必要がある。女性は労働時間が長くなっても、家事育児時間が短くはならない。このため、正規雇用や契約社員など比較的労働時間の長い女性は、多くの子どもを育てられるとは思えないのではないだろうか。一方女性の中でも家事時間が長いのは専業主婦であると考えられるが、もともと子育てや家事が生活の中心であることから、ある程度の子どもの数は持とうと思っているのだと考えられる。

表８－1．育児に関する負担と負担感，子どもの数との関連（女性）

	週平均の労働時間	配偶者の週平均の労働時間	週の家事・育児従事時間	個人年収	世帯年収	教育費	子育ての負担感	実際に持つと思う子どもの数
あなたの週平均の労働時間は何時間ですか	1.00	0.46**	−0.15**	0.40**	0.07	0.03	0.05	−0.08*
あなたの配偶者の週平均の労働時間は何時間ですか		1.00	0.03	−0.03	0.06	0.06	0.07*	−0.01
あなたは1週間で、家事や育児を何時間くらい行っていますか			1.00	−0.17**	−0.08*	−0.17**	0.00	0.30**
あなた個人の昨年の年収はどれぐらいですか				1.00	0.32**	0.00	0.04	−0.18**
あなたの世帯全体の昨年の年収はどれぐらいですか					1.00	0.16**	0.01	−0.06*
あなたのご家庭では、昨年1年間に子どもの教育費（習い事も含む）にどれぐらいかかりましたか						1.00	−0.13**	0.03
子育ての負担感							1.00	−0.13**
あなたが実際に持つと思う子どもの数は何人ですか								1.00

表８－2．育児に関する負担と負担感，子どもの数との関連（男性）

	週平均の労働時間	配偶者の週平均の労働時間	週の家事・育児従事時間	個人年収	世帯年収	教育費	子育ての負担感	実際に持つと思う子どもの数
あなたの週平均の労働時間は何時間ですか	1.00	0.50**	0.03	0.13**	0.07**	0.00	0.03	−0.03
あなたの配偶者の週平均の労働時間は何時間ですか		1.00	0.06	0.01	0.12**	−0.03	0.06	−0.06
あなたは1週間で、家事や育児を何時間くらい行っていますか			1.00	0.03	−0.02	−0.14**	−0.07*	0.11*
あなた個人の昨年の年収はどれぐらいですか				1.00	0.60**	0.13**	−0.05	−0.03
あなたの世帯全体の昨年の年収はどれぐらいですか					1.00	0.10	−0.03	0.01
あなたのご家庭では、昨年1年間に子どもの教育費（習い事も含む）にどれぐらいかかりましたか						1.00	−0.09	0.03
子育ての負担感							1.00	−0.13**
あなたが実際に持つと思う子どもの数は何人ですか								1.00

9．育児・家事および労働時間の実態

9-1　育児・家事に関する行動

家事や3歳までの子どもの育児をどの程度行っているかたずねた（Q30）。育児については、子どもがいる人のみを対象とし、すでに子どもが大きい場合は、過去の経験についてたずねることとした。

具体的には、家事については、(1)部屋の掃除、(2)洗濯（物干し・取入れ含む）、(3)炊事（食器洗い含む）についてたずねた。

また育児については、(4)風呂に入れる、(5)食事をさせる、(6)寝かしつけるについてたずねた。

これらそれぞれについて、「1 ほとんど自分でしない（0-20%未満）」「2 少しは自分でする(20-40%未満)」「3 半分程度は自分でする（40-60%未満）」「4 大体自分でする（60-80%未満）」「5 すべて自分でする(80-100%)」の中から回答してもらった結果を男女別に見たのが図9-1-1である。

家事及び育児の実際の行動に関して男女の違いは歴然である。すべての行動に関して、男女では大きくことなり、女性の場合は育児の「(4)風呂に入れる」を除いたすべての項目において、「すべて自分でする」と回答した人が半分以上を占めており、「大体自分でする」とあわせると、大体の家事育児を女性が主に担っていることが改めてわかる。

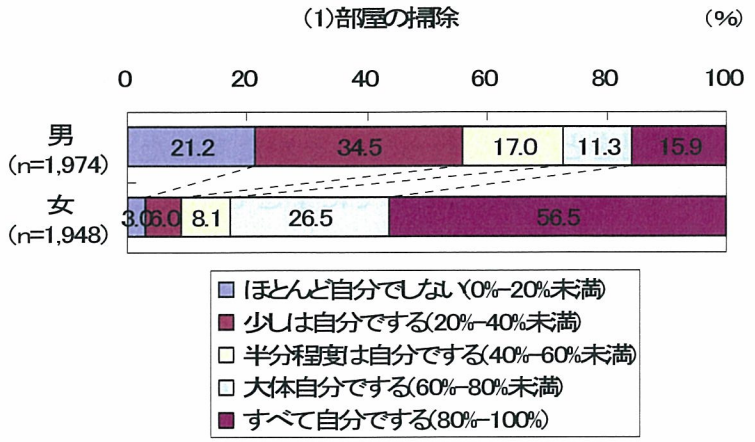
ただし、唯一育児の「(4)風呂に入れる」については、依然として女性の方が行っている割合は高いが、男性も行っているという結果となっており、育児の入浴が男性の役割として定着しつつある可能性を示している。

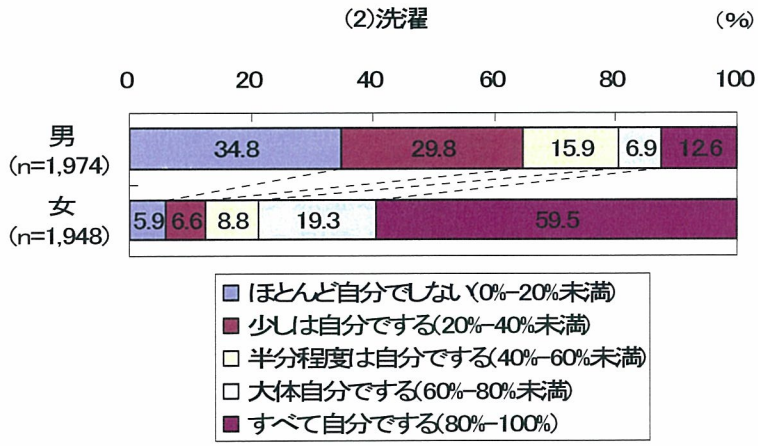
続いて、家事（部屋の掃除、洗濯、炊事）について、婚姻状態・子どもの有無別に見ると（表 9-1-1）、未婚者については比較的男女の差が小さいことがわかる。例えば、炊事については、すべて自分ですると回答したのは、男性29.8%、女性 31.7%である。またほとんど自分でしないという回答の割合も、男性は27.6％に対して女性は15.3％いた。

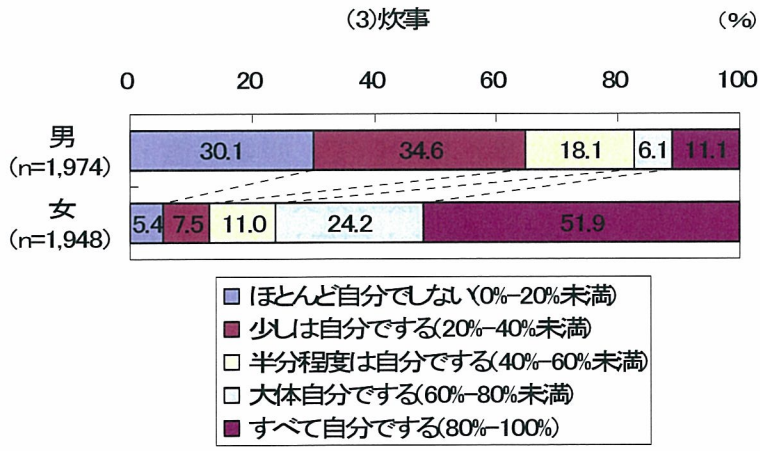
しかしながら、有配偶者（既婚子無し、既婚子有り）になると、男女差が広がる。炊事についてみると、既婚子無しについては、すべて自分とすると回答した男性は1.7％、女性は55.8％となる。またほとんど自分でしないについての解答も既婚子無しの男性は29.5％、女性は1.1％となっている。この傾向は既婚子有りにより顕著な傾向である。

婚姻関係を結んだ後、家事が女性の役割となり、子どもができるとその傾向がより顕著となることが改めてわかる。

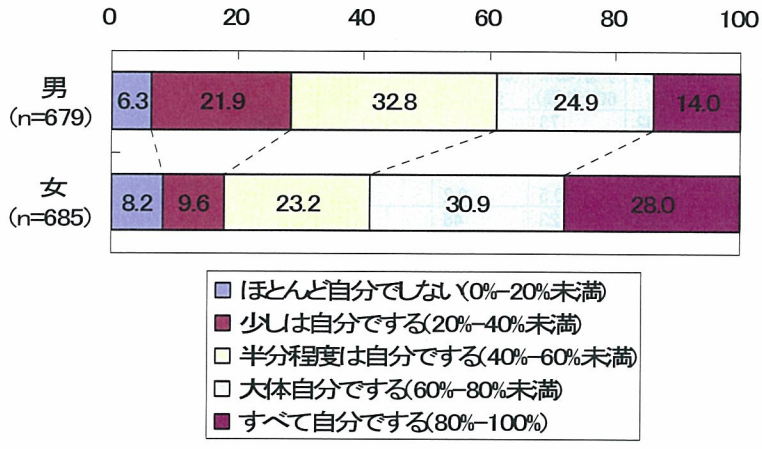
図 9-1-1　育児・家事の実際の負担の程度（男女別）



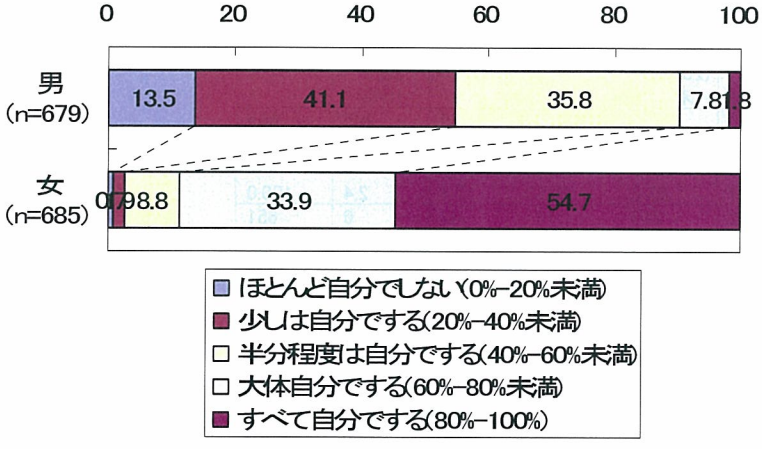




(4)風呂に入れる



(5)食事をさせる



(6)寝かしつける

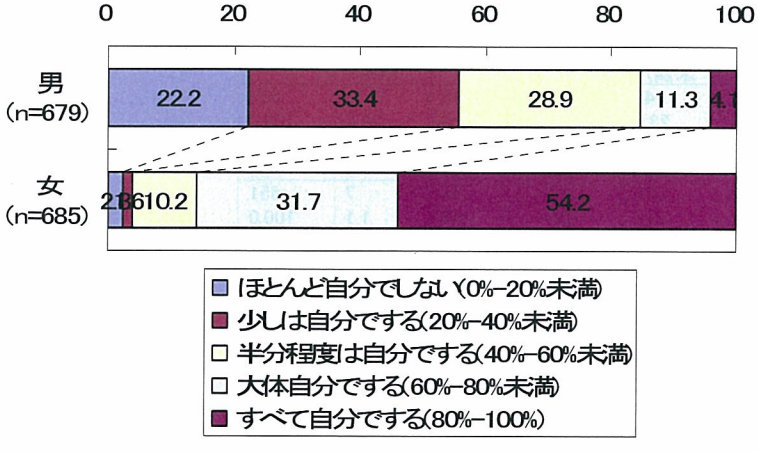


表 9-1-1　家事・育児（性別、婚姻状態・子どもの有無別）

(1) 部屋の掃除

			ほとんど自分でしない(0%-20%未満)	少しは自分でする(20%-40%未満)	半分程度は自分でする(40%-60%未満)	大体自分でする(60%-80%未満)	すべて自分でする(80%-100%)	合計
男	未婚者	度数	58	102	73	103	269	605
		%	9.6	16.9	12.1	17.0	44.5	100.0
	既婚子無	度数	193	258	135	61	13	660
		%	29.2	39.1	20.5	9.2	2.0	100.0
	既婚子有	度数	162	307	123	48	11	651
		%	24.9	47.2	18.9	7.4	1.7	100.0
	合計	度数	413	667	331	212	293	1,916
		%	21.6	34.8	17.3	11.1	15.3	100.0
女	未婚者	度数	38	67	51	121	297	574
		%	6.6	11.7	8.9	21.1	51.7	100.0
	既婚子無	度数	9	29	66	198	357	659
		%	1.4	4.4	10.0	30.0	54.2	100.0
	既婚子有	度数	9	16	38	175	393	631
		%	1.4	2.5	6.0	27.7	62.3	100.0
	合計	度数	56	112	155	494	1,047	1,864
		%	3.0	6.0	8.3	26.5	56.2	100.0

(2)洗濯(物干し・取入れ含む)

			ほとんど自分でしない(0%-20%未満)	少しは自分でする(20%-40%未満)	半分程度は自分でする(40%-60%未満)	大体自分でする(60%-80%未満)	すべて自分でする(80%-100%)	合計
男	未婚者	度数	190	116	56	38	205	605
		%	31.4	19.2	9.3	6.3	33.9	100.0
	既婚子無	度数	242	219	136	47	16	660
		%	36.7	33.2	20.6	7.1	2.4	100.0
	既婚子有	度数	242	242	118	43	6	651
		%	37.2	37.2	18.1	6.6	0.9	100.0
	合計	度数	674	577	310	128	227	1,916
		%	35.2	30.1	16.2	6.7	11.8	100.0
女	未婚者	度数	96	105	89	64	220	574
		%	16.7	18.3	15.5	11.1	38.3	100.0
	既婚子無	度数	8	11	53	155	432	659
		%	1.2	1.7	8.0	23.5	65.6	100.0
	既婚子有	度数	5	8	27	138	453	631
		%	0.8	1.3	4.3	21.9	71.8	100.0
	合計	度数	109	124	169	357	1,105	1,864
		%	5.8	6.7	9.1	19.2	59.3	100.0

(3)炊事（食器洗いを含む）

			ほとんど自分でしない(0%-20%未満)	少しは自分でする(20%-40%未満)	半分程度は自分でする(40%-60%未満)	大体自分でする(60%-80%未満)	すべて自分でする(80%-100%)	合計
男	未婚者	度数	167	142	71	45	180	605
		%	27.6	23.5	11.7	7.4	29.8	100.0
	既婚子無	度数	195	269	147	38	11	660
		%	29.5	40.8	22.3	5.8	1.7	100.0
	既婚子有	度数	222	258	133	31	7	651
		%	34.1	39.6	20.4	4.8	1.1	100.0
	合計	度数	584	669	351	114	198	1,916
		%	30.5	34.9	18.3	5.9	10.3	100.0
女	未婚者	度数	88	120	106	78	182	574
		%	15.3	20.9	18.5	13.6	31.7	100.0
	既婚子無	度数	7	12	67	205	368	659
		%	1.1	1.8	10.2	31.1	55.8	100.0
	既婚子有	度数	5	10	34	168	414	631
		%	0.8	1.6	5.4	26.6	65.6	100.0
	合計	度数	100	142	207	451	964	1,864
		%	5.4	7.6	11.1	24.2	51.7	100.0

表 9-1-2 炊事（婚姻状況及び子どもの有無別、同居家族別、性別）

				ほとんど自分でしない(0%-20%未満)	少しは自分でする(20%-40%未満)	半分程度は自分でする(40%-60%未満)	大体自分でする(60%-80%未満)	すべて自分でする(80%-100%)	合計
未婚者	本人のみ	男	度数	12	13	16	18	159	218
			%	5.5	6.0	7.3	8.3	72.9	100.0
		女	度数		1	3	11	133	148
			%		0.7	2.0	7.4	89.9	100.0
		合計	度数	12	14	19	29	292	366
			%	3.3	3.8	5.2	7.9	79.8	100.0
	本人と親もしくはきょうだい、祖父母	男	度数	152	118	54	24	19	367
			%	41.4	32.2	14.7	6.5	5.2	100.0
		女	度数	84	115	100	59	39	397
			%	21.2	29.0	25.2	14.9	9.8	100.0
		合計	度数	236	233	154	83	58	764
			%	30.9	30.5	20.2	10.9	7.6	100.0
既婚子無し	本人と配偶者	男	度数	162	236	128	35	9	570
			%	28.4	41.4	22.5	6.1	1.6	100.0
		女	度数	5	7	55	189	338	594
			%	0.8	1.2	9.3	31.8	56.9	100.0
		合計	度数	167	243	183	224	347	1,164
			%	14.3	20.9	15.7	19.2	29.8	100.0
	本人と配偶者と親	男	度数	27	28	10	2	1	68
			%	39.7	41.2	14.7	2.9	1.5	100.0
		女	度数	1	3	10	11	23	48
			%	2.1	6.3	20.8	22.9	47.9	100.0
		合計	度数	28	31	20	13	24	116
			%	24.1	26.7	17.2	11.2	20.7	100.0
既婚子有り	本人と配偶者と子	男	度数	180	204	107	26	6	523
			%	34.4	39.0	20.5	5.0	1.1	100.0
		女	度数	4	3	22	131	351	511
			%	0.8	0.6	4.3	25.6	68.7	100.0
		合計	度数	184	207	129	157	357	1,034
			%	17.8	20.0	12.5	15.2	34.5	100.0
	本人と配偶者と子と親	男	度数	33	41	17	1	1	93
			%	35.5	44.1	18.3	1.1	1.1	100.0
		女	度数	1	6	9	29	50	95
			%	1.1	6.3	9.5	30.5	52.6	100.0
		合計	度数	34	47	26	30	51	188
			%	18.1	25.0	13.8	16.0	27.1	100.0

注：同居家族の種類のうち、合計が 40 以上のもののみ取り出した表である。

また、同居家族別に、家事の分担（ここでは炊事）を見ると（表 9-1-2）、一人暮らしの未婚者については、男女とも家事を自分で行っている。一方で親等と同居している未婚者は負担の程度が小さい。特に男性はそれが顕著である。

既婚子無しについてみると、本人と配偶者の場合と、これに親が加わった場合を比べると、男性で「ほとんど自分でしない」という回答が多くなっている。

9-2　労働時間・家事時間

現在就労している人に対して、1週間あたりの平均労働時間についてたずねた(Q5_sq3)。その結果が（表 9-2-1）である。1週間平均の労働時間は全体では 37.3 時間、男性の場合は 42.2 時間、女性の場合は 29.3 時間であった。

これをさらに、就業形態及び婚姻状態と子どもの有無別に見たのが、表 9-2-2 である。

まず、就業状態別に見ると、男性の場合は、正規の職員 43.3 時間、自営業主・家族従業者・内職 41.3 時間、派遣・嘱託 40.3 時間であり、パート・アルバイト以外の人々の労働時間は大きな差はない。一方女性については、最も労働時間が長いのが、正規の職員 35.6 時間、次が派遣・嘱託 30.8 時間、自営業主・家族従業者・内職 26.5 時間がこれに続く。男性と比べて女性については、就業状態別の労働時間の差が大きい。

続いて、婚姻状態と子どもの有無別に見ると、男性の場合は、既婚子無しが最も長く働いており（44.3 時間）、次に既婚子有り（42.0 時間）、未婚者（39.6 時間）の順となっている。女性については、未婚者が最も働いており（32.1 時間）、既婚子無し（28.5 時間）、既婚子有り(24.4 時間)がこれに続く。

これらの組み合わせでみると、男性の場合、既婚子無しの正規の職員が最も長く働いている（44.8 時間）。女性の場合は、未婚の正規の職員が最も長く働いている（35.9 時間）。どの就業状態であっても、女性の既婚子有りは未婚者や既婚子無しと比べて労働時間が短いが、特に、パート・アルバイトや派遣・嘱託に関してその傾向が顕著である。

表 9-2-1　1週間あたりの平均労働時間（男女別）

	平均値	度数	標準偏差
男	42.2	1,768	17.99
女	29.3	1,059	16.34
合計	37.3	2,827	18.47

表 9-2-2　1週間あたりの平均労働時間（男女、就業状態、婚姻状態と子どもの有無別、）（単位：時間）

		未婚者	既婚子無し	既婚子有り	合計
男	正規の職員	42.4	44.8	42.3	43.3
	パート・アルバイト	24.9	26.0	32.9	25.8
	派遣・嘱託	41.0	38.5	41.5	40.3
	自営業主・家族従業者・内職	40.5	43.1	40.7	41.3
	合計	39.6	44.3	42.0	42.2
女	正規の職員	35.9	35.8	34.1	35.6
	パート・アルバイト	23.7	21.8	19.7	21.5
	派遣・嘱託	30.9	31.6	25.5	30.8
	自営業主・家族従業者・内職	26.7	27.1	25.5	26.5
	合計	32.1	28.5	24.4	29.3